

エンタープライズはし
きかんのおよめさん。

バンババルタリアン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、秘書艦として働くエンタープライズと指揮官の元に赤城が訪れる。どうやら自分に秘書艦をやらせて欲しいそうだ。仕方なく、二人は午後の秘書艦を赤城に任せることにする。その夜、エンタープライズは赤城に廊下で出会い、衝撃の事実を耳にする。

目次

エンタープライズはしきかんのおよめさ ん。	1
--------------------------	---

エンタープライズはしきかんのおよめさん。

男は普通の海軍将校であった。

これといって非なる力だったり、天賦の才を持ち合わせてる訳でもなかった。

しかし、彼は人に好かれる才能を持っていた。

教師や上司はもちろん、異性すらも引きつけ周りから信頼を得ることが得意な人間だった。

これは彼の「平等な優しさ」と少し不器用なところから生まれる「愛くるしさ」が理由である。

持っていて絶対に損をしないであろう才能。

社会において、どんなものよりも重宝され羨ましがられるモノ…人々は普通、そう思うであろう。

しかし、彼の世界ではそれこそが奇妙にも悲劇を生む一因となってしまうのだ…

………

………

男は普段通り、執務室で書類や敵地に関するデータの整理を行っていた。今は、朝の10時。今日はいつもよりも遅く作業が始まったようだ。

「エンタープライズ。この資料とこのデータを後でユニオン宿舎に持って行ってくれ。」
「ああ、直ぐに持つていこう。指揮官はこの後何を行うつもりだ？」

彼女の名はエンタープライズ。男がまだ新米の指揮官だった頃に始めてやってきた、正規空母である。その力は文句なしであり、多くの修羅場をくぐり抜けてきた実力の持ち主である。

「今日は以前編成したロイヤル艦隊の調整を演習で行おうと思うんだ。エンタープライズ達はいつも通り特別海域を廻ってもらってもいいだ。」
「わかった。じゃあ書類を届けに行くとするか。」

彼女もまた前世の記憶を持つ艦船であり、大戦中多くの活躍をした船である。
現在この泊地にいる艦船たちも彼女のことをよく知っているようだ。

ほとんどの彼女に対するイメージは最強、最高の幸運の持ち主、英雄などプラスの評価がとても多い。

しかし…中には彼女のことをよく思わないモノも僅かにいる…

「ああ、よろしく頼むよ。」

「あ、そういうえば、指揮官のことをもつと知りたいという娘も多くてな…

できればなんだが我が陣営の宿舎にも顔を出してもらえないかな？」

「うーん、今度ゆつくり時間が取れたらにするよ…ちよつと危ない匂いが…」

「ふふつ…そうか、無理な誘いを言つて悪かつたな。」

そう言う彼女が席を立ち、廊下へつながらる執務室のドアノブに手をかけた。

ガチャと扉を開けるとそこには…

不敵な笑みを浮かべ、指揮官に熱い視線を向ける赤黒の着物姿の女性が立っていた。

重桜の一航戦、赤城。

彼女もまたエンタープライズをよく思わない女性であった。

「指揮官さまあ♡今日も私！赤城が！指揮官様のために執務をお手伝いさせて…

エ、エンタープライズ……」

「あ、赤城……どうしてここに……」

二人の間に不穏な空気が漂う。男はこの空気を和ますために口を開いた。

「あ、赤城かあ……今はエンタープライズが手伝ってくれているから大丈夫だぞ……そ、そうだし……午後の執務はお前が秘書艦になってくれ！それでいいか？」

「むう……指揮官様にそう言われるなら……わかりましたわ……でも指揮官様！♡私はいつでも永続秘書艦のお誘いを受け付けておりますわ♡いや、むしろ私の方から……うふふふふふ♡」

赤城は自分の頬を撫でながら不敵な笑みを続ける。

「……なら午後は休みとするか……」

そう言い、エンタープライズは執務室を後にした。

彼女の目の奥が少し暗くなった気がした。

その日の夜、補給を終えたエンタープライズは指揮官へ明日のスケジュールの確認のために廊下を渡って執務室に向かっていた。

すると、奥からコツコツとこちらの方に誰かが歩いてくる音が聞こえた。

「その正体は赤城だった。」

面と向かい合った二人はお互い立ち止まった。

「…何をしている？お前の担当時間は終わったはずだぞ？」

「あらあ…なんだか気分が高揚してて、廊下をつい徘徊してしまいましたわ…うふふふ…」

普段は指揮官の前以外では見せることがない、赤城の不敵な笑みを見て気味が悪くなった。

「なら、さっさと自室に戻れ…そろそろ風呂の時間になるぞ。」

「わかりましたわ…」

二人は再び歩き出した。

お互いがすれ違おうとした瞬間、エンタープライズの耳元にとても信じがたい言葉が

囁かれた。

「…指揮官様の純潔…とても美味でしたわあ…♡」

「!!?!!!?!」

驚き振り返ると、すでに赤城はいなくなっていた。

彼女の心は混乱状態に陥った。

そ、そんな…まさかそんなはずは…

いや、ありえない…あいつがそんな簡単に手を出せるほど指揮官は甘く…

奴に虚言癖はあつたか…?

そんな…

嘘に決まってる!

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ!

彼女は急いで執務室に向かい、扉を勢いよく開けた。

執務室には服装の乱れた男が顔を赤くし、少し汗ばんだ状態でソファに横たわっていた。

「…指揮官…」

「はあ…はあ…エンター…プライズ…?」

「どうして…あの女に心を許したんだ…」

「な、ど、どうしてお前が知っているんだ!?!赤城はさつき…」

「どうしてだ!」バンツ!

赤城は壁に拳を叩きつける。

目の奥はさらに暗く、濁ってきた。

「ご、誤解だ!あれは決して僕からじゃない!赤城が無理やり…どうしても、言うことを聞かないから仕方なくなんだ…僕が心を許したわけじゃ…」

「…ふざけるな。」

エンタープライズは男に近づき、喉元を強く掴んだ。

「ガハツ……！エンター……プラ……イズ……な……にを……？」

「私は……あなたの正しき行動と美しい心、精神に惹かれ……あなたと第二の生を共にするつもりだった……そして、あなたに心すら奪われた……だから……この戦いを終わらせてあなたの指し示す明るい未来を築くつもりだったんだ……」

「わかつ……てるっ……オエツ！だから……きみ……を……秘書官に……」

「……これが何か知ってるはずだ……」

そう言い、彼女が男に見せたのは……

美しい指輪をつけた薬指だった。

「……！」

「私は……1年前、これをもらって……本当に嬉しかったんだ。魅力的な娘が沢山いるこの泊地の中で、私を一人選んでくれたことを……」

「あ、当たり前だろ…君は…僕が一番…信頼する、パートナー…なん…だから…」

「フツ…なら、どうして…」

「どうして私にキスすらしてくれないのだ？」

「そう言うと彼女は男の首を絞める手の力をより一層強くした。」

「ガハツ…まつ…待ってくれ…」

「私はたしかに…口調だったり、態度が男勝りなところがあるかもしれない…だけど、心はただの乙女なんだぞ…いつか私の初めてを奪ってくれる…そう待っていたんだ…全

く、指揮官は随分と奥手な人間だと思つていた自分が馬鹿らしいなあ……」

「わ、わかつた！正直に話す！だから離してくれ！」

首を絞める力が少し弱くなった。

「はあ……はあ……俺は……君たちを平等に部下だと思ひ……そして大事なパートナーだと思つてゐる……お前に指輪を捧げたのは……最も信頼でき、この泊地の誇りであるからだ……だが、それ以上の密接な関係は、ほかの娘たちの反感を買うはずだ……だから……手を出すことができなかつたんだ……」

男は本当のことを言つてゐた。彼の主張の中に嘘は一つもなく、その行動は混じりけもない平等の優しさの精神からであつた。

だが……

「……嘘だ……」

「……え？」

「私を……単に女と見てなかつたんだろ……？なら、どうして赤城には手を出せて私には出せないんだ……？」

……色気がないから？可愛げがないから？お淑やかさ？私は何もかもが足りないからなんだろ？なあ、そうなんだろ！？」

エンタープライズは華々しい戦果と裏腹に、建造当時にしては平均的且つ特徴のない空母だった。

そして現世の彼女もそれと似たようなコンプレックスを持つてる。

サラトガのような元気さ、

ヨークタウンのようなお淑やかさ、

セントルイスのような色気のような特徴の一つすら持っていない凡人だと彼女の中で勝手に決めつけてしまっていたのだ。

そして彼女は戦って戦争の終結こそを使命と気質により、赤城のような思いを露わにする積極性を発揮することができなかつた。

あるのは強さと幸運。

それだけでは、恋というのは成就しないものである…

まして、「平等」を大事にする男相手なら尚更である…

「そんなことはない…あれは単に、彼女の士気の向上のためであつて…誰にも言わないと言う約束の元、仕方なく行つただけで…それに、お前にも…良いところがたくさんあるはずだ！」

「じゃあ言ってみてくれよ!!私の特徴、私の好きどころ!指揮官は、私のような戦闘以

外に価値のない艦船など道具程度にしか思っていないのだろう!? 指輪をくれたのも、ただの戦力の増強だけじゃないのか!？」

「……」

男は危機的状況でも決して取り乱すことのない、彼女の必死の嘆きを見て言葉が出てこなかった。

「ははは……結局……言えないじゃないか……言えないんだ! そうだな! 言えないに決まってるよなあ……」

やだあ……

私は指揮官の妻なんだ……

道具なんかじゃない! そんなことは! 絶対にいやだああああ!」

バトルスターを大戦中、最も多く獲得した彼女すら末路はただのスクラップ。『道具』という扱いは彼女の心を深く突き刺すモノであった。

「お、落ち着け! エンタープライズ! とりあえず手を離して……」

弓矢は足の筋肉を貫通し、ソファにまで届いて固定された状態になっている。

「しきかん…これからは…わたしのいいところ、すきなところたくさんみつくてね？」

しきかんといっしょにずっといるから。ね？」

「そんな…あつ、うわあああああ!!!」

今度は両手の関節部分に弓矢をねじ込まれる

身動きも取れないまま、血液だけがどんどん傷口から垂れてくる。

「どうして…どうしてこんなことするんだ…なあ、

エンタープライズ!!」

その言葉を聞き、

彼女はこう言い放った。

「ふふふ…だって…

わたしはあなたのためだから。」

愛とはエゴがなければ成立しないもの…
これは…平等な愛がもたらした悲劇の物語…